

不条理でポン

校長 村井 浩昭

実は高校三年間図書委員だった。入学時に友人とともに指名されたのだが、あまり前向きではなかった。というのも当番の曜日が土曜日だったからだ。「半ドン」という言葉を聞いたことがあるだろうか。昔は土曜の午前にも授業があるのが一般的だった。午前で学校が終了する半ドンの日は魅力的だった。そんな日に放課後残って作業をすることがうれしはずはない。図書委員の任務が三年間続いたことで、途中からは、これが自分の高校生活と覚悟を決めて図書館の本に少しずつ親しむようになった。

最初は、赤川次郎や星新一など読みやすい本を読んでいたのだが、見栄っ張りの私は、「何を讀んでるの?」と聞かれたとき、「太宰」とか「三島」とか答えたくて『人間失格』、『斜陽』、『金閣寺』、『仮面の告白』など文学史に出てくるような作品を読むようになった。二十代には、外国文学を読むようにもなった。弟が大学で英米文学を専攻していたこともあって、家に『武器よさらば』(ヘミングウェイ)、『1984』(ジョージ・オーウェル)、『グレートギャツビー』(フィッツジェラルド)などの文庫本が転がっていたからだ。中でも『路上(On the Road)』(ジャック・ケルアック)には衝撃を受けた。自身がヒッチハイクでアメリカ横断をする体験をもとに書かれている。生きていくことは、人生という大陸を旅することであると教えてくれた。もっと勇敢に目に映るものを感じながら冒険してごらんと語りかけてくれた。

読書なんて、音楽を聴くように、映画を観るように、スポーツをするように楽しめばよいと思っている。人それぞれに趣向も志向も異なり、ある人には良書でもある人には悪書ということもある。大切なのは想像すること、感受することだ。考えようによっては、学校図書館は、教育現場で唯一大義名分のあるエンターテインメントの場である。図書館では、そこにある本ならばどんな種類のものでも好き勝手に手に取ることができる。そう考えると読書という行為は、思想的にも心理的にも開放されていて自由なのだ。

コロナが流行して、一九四七年発表の『ペスト』(アルベール・カミュ)という小説がコロナ前の13倍売れたという。街にペストという疫病の脅威が襲い掛かる描写が、医師リウーの手記の形で表現されている。コロナの状況下での各国の対応や人々の反応と照らし合わせると70年前の話とは思えないくらいぞっとする。こういう日常では起こりえない不条理をテーマにした文学を不条理文学というのだが、コロナが長引く今となっては、日常自体が不条理に包みこまれてしまっている。カミュは代表作『異邦人』の評価が高く、1957年ノーベル文学賞を受賞している。『異邦人』は一貫して異常な行動をとるムルソーが主人公なのだが、『ペスト』がコロナの脅威を通して身近に感じられ、気が滅入ってしまったのに比べると、不条理はこうあってほしいと思えるくらい異常な世界観でむしろ気持ち楽になった。他にも立て続けに『変身』(フランツ・カフカ)を読んでみた。ある日朝起きると巨大な虫に変身してしまったグレーゴル。この虫が人間の嫌な部分の象徴であるとか、虫が観察する世界が人間の生活を風刺しているとか、何かメッセージがあるのだろうが、そんなことはどうでもよかった。これこそが現実には起こりえない設定で、間違いなく不条理だと安心してしまった。リアルな不条理よりありえない不条理のほうが、よっぽど救われる。

P.S. 不条理と聞いて最初に思い出したのが、『不条理でポン』(蛭子能収)という四コマ漫画である。1980年代から90年代の雑誌『宝島』に連載されていた。内容があまりにもシュールでキッチュなのだが、この世の中の四コマ目が、「コロナってなんだっけな一タリラリラーン」のようなオチにならないかと願っている。